元島民のエピソード（ソ連占領下の北方領土　日ロ混住の記憶など）

～佐藤　正二さん　択捉島出身～

家は留別で駅逓をやっていた。ソ連軍が最初に入った昭和二十年八月二十八日は霧があまり出ない所なのに霧が深かった。次の年の海明けにはソ連の行政関係や家族がやってきた。日本人の家を仕切り、そこに住み始めた。学校は午前がロシアの民間人の子ども、午後は日本人と二部制だった。子ども同士は喧嘩ばかりしていたが、一緒に住んでいるから早く仲良くなる。夏休み頃からは仲良くしている人もいた。小学生なので将来の混住などは考えておらず、日本に帰る雰囲気を持っていた。

～山木　秀夫さん　国後島出身～

家の側にあった佐藤造船所がソ連侵攻後、軍用車両のガレージとなっていました。造船所にはアメリカ製のジープが五、六台あり、乗せてもらって街の中を走ったこともあります。

造船所にいたパーニャンというウクライナ人（ソ連兵）に可愛がってもらいました。パーニャンは昼食をよく食べさせてくれて、肉・じゃがいも・トマトなどの野菜が入ったスープを食べたことを覚えている。

～油本　繁さん　水晶島出身～

水晶島では今のうちに逃げようとかなりの島民が出て行った。ソ連軍の将校が来て、従来どおり仕事をしてください、春になれば根室と行き来してもよいし、食料も配給しますと言われた。支庁からは、領土問題が解決していないので各自財産を守ってくれと言われ、ソ連の将校も残って仕事をしなさいと。それに騙された。

ロシア語の勉強は、通訳をしていた朝鮮人の通訳がどうも違うようで、自分で勉強し、話せるようになって、生きていく自信がついた。